



瀧澤令、ステップス四度目の個展である。瀧澤には常に驚かされる。様々なタイプの作品を描いていくからだ。それは決して意図的ではない。何故かそういった作品が生まれてしまうのであろう。絵の具を思い切り盛り上げた作品があるかと思うと、全くのイラスト調の作品もある。具象的であると考えれば、果てしなくミニマルにしか見えないものもある。しかし全ての作品に共通していえることは、瀧澤の想像力が反映されていることである。つまり異なるように見える作品群でも、まるで瀧澤の頭の中を覗いているような気がしてくるのだ。これは瀧澤が「見られる」ことを意識していないことには繋がらない。かといって、自己

満足に陥っているわけでもない。人間には様々な可能性がある。それを瀧澤は自ら否定せず、開放しているのではないか。手当たり次第に創るのではなく、実は熱心に、丹念に、慎重に創られていると私は確信する。瀧澤は自らを客体化し、「見られる」視線を見る視点に転換することができるのだ。そこで生み出される作品を、芸術といえるのだろうか。いえる。現代美術は「美術」という分野から逃れる為に形成されたはずが、あっという間に「現代美術」という枠で自らを囲ってしまった。現代美術はもっと自由でなければならない。塗り絵やペンキ画、幼児のような絵や立体でも構わない。我々は瀧澤の作品を見てそう考える。

